

柏のある「薬師如来を祭っている寺」だった。

その寺の手前の、小さな坂道にさしかかった時だった。私の脚が、重りをつけられたように動かなくなった。夕刻には一行と合流することになっていたのに、私の心は焦りだした。しかし、棒のように硬直した足は、動かない。坂道に足が疲れたのかともみほぐしてみたが、どうにもならなかった。

恐怖心が胸の内を走った。このまま足は動かなくなるのだろうか、何か罰をこうむったのだろうか、とさまさまに思いつつ、お祈りをしていると、心の内に不思議な想念が湧き上がってきた。

「待っていないさい。助けて通るべき人が来る」というのである。

不思議な現象におののきながら、動くことのできぬ体を田のほとりに休めていると、総勢七人の一団がやってきた。見ると、三人の失明者と四人の付添人だった。

話を聞くと、一人は三十歳ばかりの男で、メチルアルコールによる失明、もう一人は十五歳の国鉄職員で、失明の原因は不明、さらにお母さんの背中に追われた四歳の少女だった。七人は、「眼が開くまで巡拝する」という。すさまじい覚悟のほどに私はたじたじとなった。

古来、遍路道は「弱い人を助けて通る」のが慣わしになっていたのに、私はこの一団を助けて通るのか、と半ば諦めの気持ちで、行動をともにすることにした。

一行とともに、柏のある寺に入っていく、本堂脇の薬師如来堂に詣でた。古来、薬師如来は病氣治癒に靈験があり、特に眼の守護神とされている。一行はそこで熱心な祈りを始めた。

その時、奇妙なことが起こった。

私は急に、失明者たちに、馬場翁から教わったばかりの「九字」を切つて「気合い」を掛けていたのである。自分自身はつきりと思い立ったわけでもなく、またその行為がどんな結果をもたらすものかを信じていたわけでもない。

参拝を終えた一行が、石段を降りて境内に降り立った時、メチルアルコールで失明したという青年が、にわかに庭にしゃがみ込んだ。そして、

「見えた見えた見えた！」

と叫んで、庭の砂をすくってはこぼし、すくってはこぼしだしたのである。

一行は果然とその青年の動作を見守っていたが、そのうち感涙にむせんで、「よかった